



日本植物病理学会ニュース 第36号

(2006年11月)

【永年会員の略歴とお話し】

永年会員 勝部利弘



昭和5年11月8日島根県に生まれ、昭和26年鳥取農林専門学校農学科を卒業する。職歴(1)国内：昭和26年農林省入省、神戸動植物検疫所勤務。昭和31年東北農業試験場栽培第一部に転出。昭和56年四国農業試験場栽培部病害研究室長。昭和63年熱帯農業研究センター勤務。平成2年千葉大学園芸学部非常勤

講師(4年間)。平成9年島根県立農業大学校非常勤講師(5年間)。(2)国外：スリランカ共和国シータエリヤ農業研究所(昭和48~50年)。バングラデシュ人民共和国中央農業普及開発研究所(昭和56年)。パラグアイ共和国農牧省中央農業研究所(昭和61~63年)。スリランカ民主社会主義共和国・マレーシア・フィリピン共和国の各国高地農業研究所(平成2年)。研究歴：日本植物病理学会昭和25年入会。北日本病害虫研究会員(昭和31年入会、36年間)。四国植物防疫研究協議会員(昭和56年入会、22年間、副会長1期)。島根病害虫研究会平成3年入会。

東北農試においては主としてイネいもち病の生理生態学的研究に従事し、昭和52年「いもち病による水稲の被害に関する研究」で東北大学より農学博士の学位を授与される。四国農試においてはイネのほか野菜類のウイルス病、土壌病害、細菌病類防除の研究に従事し、熱帯農業研究センターにおいては在外研究員支援業務の傍ら国際植物病理学会京都大会の支援業務で一翼を担った。

スリランカではジャガイモの疫病を中心とした熱帯高冷地(標高2000m)の野菜類病害防除の共同研究に従事し、キャメロン・ハイランド(マレーシア)やバギオ(フィリピン)も訪ねて研究成果や情報を交換した。バングラデシュでは研究所のインフラを拡充整備すると共に研究手法の技

術移転に携わり、パラグアイではイネを中心に、ワタ、ダイズ、カンキツ類の病害防除の共同研究に従事した。

学会の研究発展は目覚しく同慶の至りであるが、作物の生産現場においては学会報が理解・活用されることは無く、学会の存在さえ認識されていない乖離の現状に危惧を抱いている。

永年会員 木曾 皓



昭和5年4月愛媛県で出生。昭和28年3月愛媛大学農学部農学科卒業。同年4月愛媛大学農学部農学科植物病理学講座に文部教官として勤務。昭和38年農林水産省四国農業試験場栽培部に転勤(主任研究官)。昭和48年農林水産省野菜試験場久留米支場病害研究室長に転勤。昭和

58年社団法人日本植物防疫協会研究所に出向。同64年研究部長。平成6年株式会社武蔵野種苗園種苗部へ技術顧問として入社。その後特別顧問として現在に至る。

その間文部教官時代は、学生の教育・実習に当たるとともに、温州ミカンの萎縮病について文部省科学研究費を受けて、その原因がウイルス病であることを解明し、弱毒ウイルス等の作出に携わった。四国農業試験場時代はイネ穂枯れの原因究明と薬剤防除技術の確立、イネ縞葉枯病の感染と発病。野菜試験場時代は西南暖地における野菜病害の発生生態の解明と防除技術の確立、薬剤耐性菌、特にベノミル・チオファネートメチル剤に対する耐性に関する研究。キュウリ緑斑モザイク病の簡易検定法と防除技術の確立。キュウリ斑点細菌病の伝染源の解明と種子消毒法。日本植物防疫協会研究所時代は、専ら新農薬の開発と効果的防除法の確立。耐性菌に対する農薬の混用による防除法等を解明した。

武蔵野種苗園では主として、野菜類の土壌病害に対する

抵抗性品種の育成に協力し、根こぶ病、白さび病、フザリウム病等の問題病害の対応に寄与し、抵抗性品種を作出した。また、日本種苗協会の種子消毒ワーキンググループの一人として、野菜病害の種子消毒剤登録認可に必要な試験を実施した。

以上の研究成果に対して、昭和47年に「イネ縞葉枯病の感染と発病」に対して九州大学から農学博士を授与された。また、昭和58年には「西南暖地における野菜病害の発生生態の解明と防除技術の改善に関する研究」で農林水産省発生予察功労賞を授与され、昭和62年には日本植物病理学会賞を授与された。研究歴50年になるが、一重に立派な大先輩に指導され、励まされ今日まで無事業績を残すことができたことをこの上ない喜びとしている。私の信念として、自分の足で歩き、物を見、その疑問をとことんまで解決して新しい結果を導き出す気持ちは今なお持ち続けている。

永年会員 松本和夫



昭和6年2月11日愛知県で生まれ、昭和26年3月岐阜農林専門学校農科卒業、樋浦誠教授の講義に魅せられ植物病理学の道を志した。同年5月岐阜大学農学部雇（教務職員）、昭和27年8月農林省中国四国農業試験場病害第2研究室（岡本弘室長）に採用された。折からイネの大敵であるいもち病の防除に卓効がある水銀剤（セレスン石灰）が発見された直後であり、研究室あげて防除の研究に当たった。中国農業試験場と改編されるまで26年間在籍したから、いもち病防除の仕事がライフワークとなった。昭和53年7月福島県農業試験場（いもち病指定試験地）に出向、100年に一度ともいわれる大冷害に遭遇、いもち病の大激発を体験し、いもちの被害と語源を探求した。昭和59年3月農業研究センターに復帰、インドネシア国食用作物研究所に一時滞在後、昭和60年10月農業生物資源研究所微生物保存研究チーム長として、微生物遺伝資源の保存の研究と保存業務、施設の設立に当たった。平成2年12月同所定年退官。インドネシア国薬用作物、香辛料研究所（2年間）、1994年からブラジル国セラード農業研究センターで研究協力（3年間）に従事した。その間科学技術庁中期在外研究員として米国コネチカット農試で電算機利用による病害発生予察（昭和50年）、微生物保存の現状について英独蘭の保存機関を調査（昭和62年）した。また1979年に病虫害管理におけるシステム解析に関する国際会議で発表（Pest

and Pathogen Control, Strategic, Tactical, and Policy Models, John Willy & Sons Pub., 1984 所載）した。

私は病害防除の現場に身を置くことが多かったから、ぶっかけ試験と言われる状態から抜け出すため、試験にあたっては実験計画法的な手法、防除にはアナログシミュレーションの手法（イネ葉いもち病に対する薬剤防除効果のアナログ・シミュレーション解析に関する研究、中国農試報 E15 号）、発生予察には電算機による予察法、種子消毒は薬剤の取着面から追求した（中国農試報などで報告）。効果解析には多重比較法を導入した。後年携わった微生物ジーンバンクの設立は保存されていた各研究機関の保存株目録の作成が急務とされたから目録作成に当たり、保存研究は同僚研究員諸氏とサブバンクの各研究機関にお願いしてジーンバンク業務が遂行された。関係諸氏に感謝します。

就職した頃は「農学栄えて農業衰ふ」といわれたものですが、現在は国際競争で苦境に立たされる農業を振興するため、今後の研究発展を祈念します。

就職した頃は「農学栄えて農業衰ふ」といわれたものですが、現在は国際競争で苦境に立たされる農業を振興するため、今後の研究発展を祈念します。

永年会員 茂木静夫



昭和4年9月21日山形県に生まれる。山形県立酒田中学校（旧制）、山形県立農林専門学校を経て、山形大学農学部を28年3月に卒業、同年東北大学大学院農学研究科に入学、34年3月修了、同年4月山形県立農業試験場庄内分場に、36年同本場に勤務し、稲胡麻葉枯病ほか、県発生予察員を担当、38年8月に農林省東北農業試験場、同45年9月北陸農業試験場、同52年9月九州農業試験場に勤務し、その間主にイネいもち病、紋枯病、籾枯細菌病などの研究に従事すると共に後進の指導に当たった。

主な研究略歴は次の通りである。昭和20年代後半に大発生した大豆黒痘病の侵入と抵抗性機作の解剖研究により、昭和37年東北大学より学位を授与された。いもち病研究は病菌のレース、発生生態研究に主として携わり先駆的業績を上げた。九州地域で昭和50年前後から多発生となったイネ籾枯細菌病の研究に着手し、発生生態と防除法の基礎研究を手がけた。本病は被害が顕著であり、発生機作、被害、伝播様式などの解明を行った。その他サトウキビ黒穂病、いもち病菌の空中飛散、麦類赤カビ病の発生生態など広範囲にわたる研究を実施した。

昭和54年中国雲南省農業科学院に3カ月間イネいもち病の研究指導に出張し、いもち病による激甚な被害の実態を

報告した。昭和61年8-9月にはフィリピンおよびインド両国にサトウキビの病害調査に出張し、各地で発生実態を調査し、沖縄県のサトウキビ黒穂病の防除に貢献した。昭和61年8月には韓国農業試験場（水原市）に主にイネいもち病の研究指導に3ヵ月出張した。

昭和62年4月からインドネシア国農業省作物保護局にJICA（国際協力事業団）長期派遣専門家として、イネいもち病の研究指導に5ヵ年従事した。各地のイネ病害の発生実態を調査し、新細菌病である赤条斑病の発生を確認し、本病が広範に各地に分布し、主に葉身の枯死による被害が著しいことを明らかにした。さらに平成5年5月から4ヵ年、インドネシア国香辛料・薬用作物研究所にJICA長期派遣専門家として工芸作物主にチョウジ、バナラ病害の研究強化の指導に携わった。

省みて期待に副えるような十分な成果を上げることは必ずしもできなかったが、その場その場で鋭意最善の努力をした。現場で抱えている問題を中心に据えて、研究面から防除に寄与できる問題はなにかを常に念頭に置いて取り組んできたつもりである。この度は永年会員に推挙いただき感謝しております。

永年会員 西村典夫



1928年（昭和3年）8月15日生。福島県。1949年鯉淵学園本科学卒。助手・講師・助教授を経て1970年教授。1994年退職までの45年間同学園勤務。現在名誉教授。その間、植物病理学・応用昆虫学・農薬学・微生物学・植物生理学などの講義・実験を担当。教務部長・図書館長などを

を歴任。農業改良普及員通信教育（農水省）・農協営農指導員研修（茨城県）・日本農業実践学園・茨城県農業大学校・国際農業研修センター（国際協力事業団）などの講師。1957年、東京大学農学部植物病理学研究室研究生を契機に植物ウイルス病学を専攻。トウガラシモザイク病の種子伝染、植物ウイルスの分類学的研究（文部省科学研究費・東京大学・共同研究）、農作物ウイルスの同定に関する研究（文部省科学研究費・東京大学・共同研究）などに参加。1967年、ファイトプラズマが発見され、ミツバてんぐ巢病の研究（東京大学と共同）に取り組み、媒介昆虫としてヒメフタテンヨコバイを見いだした。1996～2001年に生研機構の委託研究（東京大学・農業研究センター・鯉淵学園の共同）で、ファイトプラズマの昆虫における宿主決定機

構の解析を担当。関連してミツバてんぐ巢病およびタマネギ萎黄病ファイトプラズマがヒシモンヨコバイによって、さらにヒシモンモドキによっても伝搬されることを明らかにした。

顧みて、本邦植物病理学の進歩発展に役立つ程の研究成果も無く、また学会の発展に寄与することも出来なかったけれども、植物病理学を通じて、実に多くの方々と切磋琢磨の機会を与えて戴いた。期せずして聊か斯学の普及に関わったのかも知れない。それと云うのも、人師に遭い諸賢に恵まれたお陰であって、この機会に、深甚なる感謝を捧げたい。

永年会員 田濱康夫



1930年（昭和5年）10月1日、広島県に生まれた。旧姓は金清、学卒まで旧姓であった。広島大学附属高等学校を昭和25年に卒業し、愛媛県立松山農科大学農学科に進学して昭和29年に卒業した。続いて北海道大学大学院農学研究科農業生物学科の修士課程を修了して農学修士の学位を得た。1956年（昭和31

年）、熊本県蚕業試験場に奉職した。熊本在住15年間に当時、蚕糸界で大問題であったクワ萎縮病の研究で、1968年に北海道大学から農学博士の学位を得た。広島農業短期大学に移り、講師、助教授、教授を経て、1989年に広島県立大学、1997年に定年退職し、現在は名誉教授である。広島に移ってから広島県としての重要樹であった桐の、特にキリてんぐ巢病の研究を重点的に行った。

1981年（昭和56年）、文部省の科学研究費の助成を受けて、米国ニュージャージー州立ラットガース大学ワックスマン微生物研究所のマラモロッシュ研究室に6ヵ月間滞在した。ここで柑橘石化病の病原体であるスピロプラズマの研究に従事した。昭和56年6月24日の偶然性が私の生涯にかかる重要な研究への転機を与えた。その時の物体を変身物体と名付けた。1989年10月、ニューヨーク科学アカデミーのアクティブメンバーに選出され、続いて当アカデミーがダーウィンの生誕を記念して作られたダーウィン会の有力なメンバーとなった。偶然性とは顕微鏡下、スピロプラズマの培地に染色用のクリスタルバイオレットを加えた事であり、結果としてマイコプラズマ進化論—生命の根源—の研究が完成した。研究発表の場は多岐にわたり、日本芝草学会から国際細胞学会にも及んだ。

2001年11月27日、米国の United Cultural Convention から21世紀を記念して作られた“2001 Noble Prize”の第1号を受賞し、2006年4月20日には英国のケンブリッジにある International Biographical Centre の永久限定100席のうち78番目に、微生物の分野での評価により Hall of Fame へ殿堂入りした。

永年会員 高久恒夫



昭和2年12月6日長野県に生まれる。昭和24年3月東京農業大学専門部農学科卒業。同年4月栃木県生産利用農協連経営部（現・農協中央会）勤務。昭和27年4月栃木県農業試験場病理昆虫部に転職、病害虫発生予察、植物病理担当。同40年4月同県農務部農産園芸課植物防疫担当。同45年同蚕糸農産課植物防疫係長。同52年同普及教育課特別専門技術員（病害虫）。同55年同県下都賀農政事務所所長補佐。同57年同農政部蚕糸農産課課長補佐。同58年同農業短期大学校主任教授。昭和60年3月栃木県を退職。同年4月（財）栃木県農業公社嘱託、同63年3月退職。同年4月中外製薬（株）農薬事業部技術顧問。平成元年12月（株）アグロス技術顧問に出向、同5年12月中外製薬（株）を退職。

生利農協連では、県の馬鈴薯原種圃の検査員の任命を受け、紫外線照射機により戦後海外から侵入した新病害輪腐病の鑑別除去を行い、馬鈴薯輪腐病対策が初仕事であった。農試時代、発生予察については、県内地域の病害虫の発生消長調査など予察法の解明に努めた。当時は未だ戦後の食糧増産の時代で、明日の普及に移せる病害防除法の要請が多く、防除に関する課題が多かった。その後畑作振興の推進に伴い、土壌病害が問題となり中でも原因不明であった高原大根の病害と取り組み、大根萎黄病の試験を実施し、実用的な防除法を確立することができた（関東東山病害虫研究会報10・11・12集）。また、いもち病真性抵抗性水稻クサブエのいもち病発生原因の究明に当たった。専技時代には、水稻の作況を左右した水稻縞葉枯病防除のため航空防除など広域防除を含む防除体系を確立し、生産の安定を図った。また、土壌病害防除のため、「夏季ハウスの密閉によるトマト褐色根腐病の防除」の実証試験を実施し、土壌消毒の1つの方法として普及を図った（太陽熱利用による土壌消毒に関する実証的研究、農林水産省農業研究センター、昭和57年3月）。これ等の試験研究に当たり、当時

の農技研、農事試の先生方からいただいた温かいご指導、ご支援に感謝いたし、今回永年会員に過分なご推挙をいただきありがとうございます。厚くお礼申し上げます。学会員皆様のご活躍、活力ある学会のますますのご発展をお祈りいたします。

の農技研、農事試の先生方からいただいた温かいご指導、ご支援に感謝いたし、今回永年会員に過分なご推挙をいただきありがとうございます。厚くお礼申し上げます。学会員皆様のご活躍、活力ある学会のますますのご発展をお祈りいたします。

【本学会活動状況】

1. 研究会開催報告

(1) 第42回植物感染生理談話会

平成18年度の植物感染生理談話会は、8月17日～19日松江市の松江テルサにおいて開催され、80名近い研究者・学生諸氏のご参加を頂いた。本年度は「病原体の寄生戦略と植物の応答」というテーマで、ウイルス病、細菌・ファイトプラズマ病および菌類病分野においてご活躍の先生方に、最新の研究成果・これまでの経緯をとりまとめてご紹介いただいた。講師の先生と演題を以下に示す。秋光和也氏「糸状菌病の特異性決定における宿主特異的毒素の機能」、川北一人氏「植物の感染応答因子としてのNO」、石井英夫氏「黒星病菌の寄生性とナシの抵抗性機構解明を目指して」、伊藤真一氏「ファイトアンティシピンに対するトマト萎ちょう病菌の自己防御機構」、木原淳一氏「イネごま葉枯病菌の光環境応答」、津下誠治氏「植物との相互作用に関するイネ白葉枯病菌 *hrp* 遺伝子群の発現制御機構」、向原隆文氏「青枯病菌の *Hrp* タイプ III 分泌系を介した植物感染機構」、塩谷 浩氏「カンキョウかいよう病菌における非病原力/病原力 (*avr/pth*) 遺伝子の役割」、柿沢茂行氏「ファイトプラズマのゲノムから読み取る寄生戦略」、吉川信幸氏「リンゴ小球形潜在ウイルスの感染・移行とRNAサイレンシングの誘導」、笹谷孝英氏「レタスビッグベイン病の病原ウイルスと媒介菌について」、竹下 稔氏「重複感染における植物ウイルス間の相互作用」、寺岡 徹氏「イネいもち病菌の寄生戦略と植物の応答」、加来久敏氏「ゲノムから見た植物病原細菌の寄生戦略と植物との相互作用の解析」、奥野哲郎氏「植物ウイルスの感染戦略」。また、島根大学総合科学研究支援センターの中川 強氏に「植物の気孔形成に関わる遺伝子」という演題で特別講演をしていただいた。さらに、ポスターセッションでは若手研究者や大学院生を中心に23題の発表があり、ベストポスター賞（3題）が授与された。会期を通じて活発に討議がなされ、盛会のうちに全日程を終了することが出来た。次回開催については京都府立大学が担当することが、幹事会で了承された。（荒瀬 栄）

(2) 第23回土壌伝染病談話会開催報告

9月7日から8日の2日間にわたり群馬県下で、第23回

土壌伝染病談話会が開催されました。1日目は草津町にある音楽の森国際コンサートホールを会場に講演会を行い、2日目はエクスカージョンを行いました。講演会には112名の参加を頂きました。第一線でご活躍の演者の皆様から11題のご講演があり、活発な質疑応答が行われました。第1のセッション「有用微生物を利用した病害防除」では、近藤則夫氏に「土壌伝染性病害抑制を目的とする非病原性 *Fusarium oxysporum* 株の利用」、雨宮良幹氏に「有機物施用による土壌病害の防除」、西村範夫氏に「土壌燻蒸消毒後のサラダナ根腐病の再発と生物防除」、水久保隆之氏に「施設トマトのネコブセンチュウと萎凋病菌の IPM における熱水消毒と微生物資材の相互作用」の題目でご講演を頂き、有用微生物を利用した実用化防除技術の開発・普及における問題点などを様々な観点から論議しました。第2部の「土壌伝染性ウイルスの発生生態と防除」では、津田新哉氏に「*Olpidium bornovanus* によるメロンえそ斑点ウイルス媒介機構解明とその土壌伝染を遮断する生物防除技術の開発」、石川浩一氏に「内生細菌利用を基幹としたレタスビッグベイン病の総合防除」、守川俊幸氏に「チューリップ土壌伝染性ウイルス病の防除」の題目でご講演を頂き、土壌伝染性ウイルス病のなかでも最近とくに問題となっているこれらのウイルス病について、今後解決すべき研究課題などを熱心に討議しました。第3部の「北関東地域で発生する土壌病害」では、小木曾秀紀氏に「レタス根腐病の総合防除」、小河原孝司氏に「茨城県のメロン栽培で発生する土壌病害と防除対策」、酒井宏氏に「群馬県における野菜土壌病害の現状と対策」、柴田聡氏に「コンニャク土壌病害の現状と対策」の題目でご講演を頂き、問題となっている病害の現在の発生と取り組みの状況やこれまでの研究成果などについて理解を深めました。エクスカージョンには78名のご参加を頂き、孺恋村の夏秋キャベツ栽培と昭和村のコンニャク栽培地域を視察しました。参加者は説明を熱心にメモするとともに盛んに質問を差し知見を深めていました。多くの皆様からのご協力とご支援によって本談話会を開催することができました。厚く御礼申し上げます。次回は2年後に近畿中国四国農業研究センターが中心となって開催される予定です。(高橋賢司)

(3) 第3回教育プログラム

3回目の教育プログラムは初めて東京の地を離れ、堺市の私どもの大阪府立大学生命環境科学研究科の学生実験室で、8月28日から9月1日までの日程で開催した。宮城県から大分県までの各地から集まった25名の参加者の皆さんには5日間、朝9時半から夕方5時過ぎまでみっちりと言

人からの指導を受けながら実習三昧にふけていただき、たいへん好評だったようである。

1日目の午前は一谷多喜郎先生の「土壌病害の診断法」の解説、午後は東條元昭先生の「*Pythium* 属菌の分離・同定・保存方法」の実習。2日目の午前は津田盛也先生の「不完全菌の分類と同定(1)」で、たくさんの病気のサンプルをお持ちいただき、病原体の観察法を実習した。午後の但見明俊先生の「不完全菌の分類と同定(2)」では、不完全菌の分類の解説に加えて、エンドファイト観察の実習をした。3日目午前の駒田 旦先生の「フザリウム病とその防除、とくに生物防除法」では、膨大な資料とスライドを使った解説。午後の相野公孝先生の「有用な植物内生細菌の簡易検索法」では、蛍光性細菌の検索法の実習。4日目午前・午後の我孫子和雄先生と窪田昌春先生の「作物の診断技術と防除法」では、多くの病害標本を材料に、診断と同定の実習と病原体レースの解説。最終日の益子道生先生の「農薬試験法—殺菌剤試験を例として—」では、いもち病防除剤のスクリーニングを実習した。すべての実習の終了後には、草刈眞一実行委員より参加者の皆さんに修了証を手渡した。

今回は、参加者それぞれが光学顕微鏡と実体顕微鏡を使えるようにし、プロジェクター、スライド映写機に加えて、ビデオカメラの映像をスクリーンに投影して、講師の手元がよく見えるように工夫した。初日と4日目の夕方には学内で簡単な懇親会を設けて参加者と講師の交流を図ったが、参加者の皆さんの多くは毎晩街へ繰り出し、大阪経済の活性化に貢献していただいたようである。

今回のプログラムでは25名の定員に対して38名の応募者があったが、締切り後の問い合わせも多かった。プログラムの目的から学生さんには遠慮していただき、1機関からの参加者は1名に限らせていただいた。参加者のうちの10名は民間企業等からの参加で、農業会社の研究所等にとってもこのようなプログラムのニーズが高いことが分かる。

なお、今回の教育プログラムの実現に当たっては、西和史、岡山健夫、草刈眞一、岡田清嗣、東條元昭の皆さんに実行委員としてご尽力いただいた。実習指導を快くお引き受けいただいた講師の先生方、実験助手を務めていただいた方々も含めて、改めて感謝申し上げます。(大木 理)

2. 部会活動状況

(1) 部会開催状況

① 東北部会

日 時：2006年9月28～29日

場 所：山形大学農学部（鶴岡市）

②関東部会

日 時：2006年9月14～15日

場 所：東京農業大学農学部（厚木市）

(2) 部会開催報告

①東北部会

平成18年度東北部会は9月28日、29日の2日間にわたり、山形大学農学部先端教育研究棟を会場に開催され、参加者は66名であった。講演数は26題で、講演内訳はウイルス・ウイロイド病関係14題、糸状菌病関係12題で、連日活発な質疑応答が行われた。一日目の講演終了後、部会幹事会続いて懇親会が開催された。懇親会はワシントンホテルにおいて60余名の参加者を迎えて盛大に行われ、会員間の懇親が大いに深められた。部会幹事会では庶務報告、会計報告の後、東北部会会員表彰（東北部会地域貢献賞）の実施、幹事の選出、次年度の開催地などが審議・了承された。次年度部会長には、部会会則に基づき部会幹事の選挙により、岩手大学の吉川信幸氏が選出された。平成19年度の部会は秋田県で開催されることが承認され、開催地幹事には秋田県立大学生物資源科学部の古屋広光氏が承認された。これらの審議・承認案件は二日目の午前最初に行われた部会総会で提案・審議され、全て承認された。二日目の講演終了後には若手会員によって企画された特別講演（秋田県立大学生物資源科学部の藤晋一氏）と発表会が行われた。発表題数8、参加者数33名で活発な討論が行われた。

（池上正人）

②関東部会

平成18年度関東部会は9月14、15の両日、神奈川県厚木市にある東京農業大学農学部厚木キャンパス内のトリニティーホールで開催された。札幌市での大会が6月初旬に開催されたばかりとあって講演申込数が30題と少なく、これに比例して参加者も減少するのではとの予想に反し、2日間の参加者は合計で175名に達し、これに名誉・永年会員等の招待者を併せると約200名という盛会となり、初日終了後の懇親会も65名の参加を得、主催者側の心配は杞憂に終わった。会場は500名を収容するホールで音響効果が良く、隣接するハワイエが明るい休憩室として機能し、参加者からは好評を得ることができた。部会終了後には若手の会も開かれ、約60名がこれに参加して熱い討論を繰り広げていた。主催者側としてはこれに自信を得て、来年もこの地で部会を開催することを予定しており、より多くの会員の皆様に集まって頂けるよう、次回こそは多数の講演申込をお願いする次第である。

（陶山一雄）

【訂正とお詫び】

学会ニュース第35号（2006年8月）の【会員の動静】でお知らせした人事（大学関係）のうち、藤 晋一氏の助教は助教の誤りでした。訂正してお詫び致します。

【学会ニュース編集委員コーナー】

本ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを主旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せ頂きたいと思っております。

投稿宛先：〒170-8484 豊島区駒込1-43-11

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX: 03-3943-6086

または下記学会ニュース編集委員へ：

松山宣明、夏秋知英、石井英夫、竹内妙子、小坂橋基夫、各委員宛

編集後記

学会ニュース第36号をお送り致します。本号ではこの度永年会員に推挙されました8名の方々のうち7名の方々のご略歴とお話を掲載させていただきました。永年にわたる学会へのご援助とご協力に感謝いたしますとともに、国内外の多岐にわたるご活躍に心より敬意を表します。お話の中で複数の方から厳しくご指摘のありました「学会と現場との乖離」は永年の問題ではありますが、急速に拡がり限りなく分化・深化を続ける科学の側面をいかに発展させるか、現場に直結する応用の側面をいかにバランス良く発展させるかを改めて考えさせられます。その他、第42回植物感染生理談話会、第23回土壌伝染病談話会、第3回教育プログラム開催報告、部会開催報告を掲載致しました。活発な学会活動の様子が伺われますことご同慶の至りです。主催者の皆様方のご尽力に心から感謝申し上げます。

（松山宣明）

会員のご逝去

名誉会員土居養二氏は平成18年8月22日にご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。